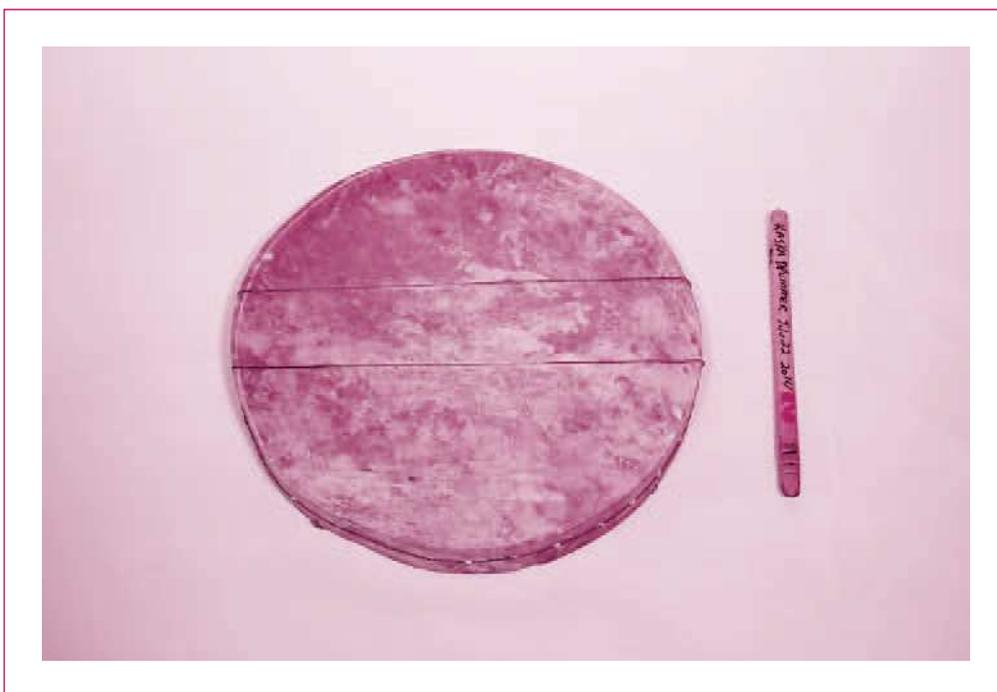




北方民族博物館だより

No. 109



H29.16 スティック・ギャンブリング用ドラム

アサバスカン・インディアン／カスカ カナダ／ユーコン準州／ミント(収集)

41.0 x 6.0 cm Amos Dick制作(2014年)

ユーコンなどのアサバスカン・インディアンの伝統的なゲーム「スティック・ギャンブリング」で用いられる専用のドラムである。スティック・ギャンブリングでは、二つのチームに分かれ、片方のチームが左右どちらかの手に小石等を隠し、相手のチームがそれを当てる。ドラムはゲームを行っている人たちの周りで叩かれ、場を盛り上げる。本資料は2017年にユーコン準州のミントで行われた「第29回ユーコンハンドゲーム選手権 (Yukon 29th Annual Handgames Championship)」で実際に使用されていたものである。

目次 Contents

- 1 表紙 スティック・ギャンブリング用ドラム
- 2 講座「先住民文化について語る、ということ
ーオーストラリア アボリジニからジャッカ・ドフニへの道」
／講座「アイヌ語地名の近現代史を考える アイヌ語地名はどう書きかえられたか」
- 3 北海道立北方民族博物館資料目録13 岡正雄・馬場脩 千島・樺太アルバムの発行について
／北海道150年記念展示 北海道庁測量標石「網走天測点」
- 4 INFORMATION

講座

先住民文化について語る、ということ —オーストラリア アボリジニから ジャッカ・ドフニへの道

2018. 3. 24

講師：中村 和恵氏（明治大学教授）

平成29年度の企画展『永遠のジャッカ・ドフニ 北方少数民族資料館ジャッカ・ドフニの35年間』の関連事業として、明治大学の中村和恵氏をお招きして、講座を開催しました。（企画展については前号をご覧ください。）



講師の中村和恵氏

ジャッカ・ドフニはウイлтаが自らの文化を語った資料館ですが、これに対して外の者が他者の文化を語るとはどのようなことなのかをテーマにお話いただきました。

アボリジニという言葉は、英語の形容詞アボリジナルからきているよび方で、民族名ではなく、オーストラリア先住民全体をさす言葉です。最近ではアボリジナル・ピープルともよばれます。中村氏は講座のなかで、オーストラリアでのフィールド調査から得られたいくつかの事柄を紹介くださいました。

特に参加者の関心をひいたのは、中村氏がおもちくださった、アボリジナル・アートです。点描で特徴づけられたこの芸術作品は、イギリス人教師によって指導され、広く知られるようになりました。現在では高額で取引されるようになってきましたが、古くから行われていた岩絵や儀式時のボディペインティングという伝統の上になりました。

そのデザインは祖霊から、祖先を経てうけつがれる、分与できない財産とされています。また一見すると抽象絵画のようですが、描かれているそれぞれの要素に意味があります。そして、見せてはいけないデザインがあり、それは注意深くとりぞかれているということでした。

講座のなかで上映くださった映像には、最初に警告がはっていました。これはアボリジニの伝統では亡くなった人を見てはいけないとされているため、そうした人物が写っているかもしれないことを知らせるものでした。

民族の秘密を、研究者はどのようにして外部に伝えられるのか。先住民文化について他者が語る時には、対象となる文化の作法を知る必要があります。また正しい語り方についてもすぐ答えがでるものではないとまとめられました。

(学芸グループ 笹倉いる美)

講座

アイヌ語地名の近現代史を考える アイヌ語地名はどう書きかえられたか

2018. 5. 19

講師：山田 伸一氏（北海道博物館学芸主査）

北海道博物館の山田伸一学芸主査をお招きして、アイヌ語地名に関する講座を開催しました。

アイヌ語地名の講座というと、たとえば知床はアイヌ語のsir(地)-etok(先)からきているというような由来に関心を持たれる方も多いと思いますが、今回は、アイヌ語地名の意味の話で



講師の山田伸一氏

はなく、sir-etokがどのような経緯をたどって知床という漢字二文字の、現在の表記になっていったかを主なテーマとしてお話いただきました。

アイヌ語には文字がなかったため、北海道を江戸時代に調査した人たちは、アイヌの人たちが使っていた地名を、耳で聞いて仮名で表しました。ただしアイヌ語に独特な発音があったため、仮名では表しきれない部分がありました。

さらに開拓使（北海道に明治初期に置かれた官庁）は、村名のすべてを漢字にしました。このときに、漢字二文字にするという原則があったため、かなり無理があり、難読の問題がおきたり、アイヌ語の意味にそった漢字が選択されたわけでもなかったため、元のアイヌ語とは異なった意味がついたり、音が変わってしまった場合もあります。

明治19（1886）年に設置された北海道庁は、明治23（1890）年に難読地名は改称し、難字を避け、字（あざ）は仮名に、新たに村名を命名するときには開拓に縁故のある名称からの命名も許容するようになりました。

明治43（1910）～44（1911）年には、アイヌ語地名は覚えづらく、郷土愛も養いづらいという意見が出され、字も仮名から漢字へ、またそれまでは仮名表記だった山、川、湖沼名を漢字とする方針となりました。そして昭和10年には明確に字名にアイヌ語を避けるとされました。

単にアイヌ語地名に漢字が当てられたということではなく、アイヌと和人の関係や、アイヌの人びとが置かれた状況が反映されているという、北海道のアイヌ語地名がたどってきた複雑な歴史の一端が紹介されました。

(学芸グループ 笹倉いる美)

北海道立北方民族博物館資料目録13

岡正雄・馬場脩 千島・樺太アルバムの発行について

北方民族博物館では、これまで12冊の所蔵資料目録を発行してきました。

13号は平成9年にヨーゼフ＝クライナー氏より当館に寄贈された、民族学者の岡正雄氏と考古学者の馬場脩氏の千島・樺太調査に関連した写真を整理したものです。

馬場氏は北千島の発掘調査を1933年から1938年にかけて5回行い、このうち3回目、4回目に岡氏が同行しています。樺太の多来加^{たらいか}方面の調査は1937年、1938年に行われました。その調査で収集された資料の一部は、函館市博物館に収蔵されています。

寄贈写真は厚紙の台紙に紙焼きの白黒写真が添付され、撮影地などがインクまたは鉛筆で記載されています。また、台紙には朱のインクでOka、黒のインクでBabaのスタンプが押されていることがあります。

サハリン州郷土博物館のオリガ・シューピナ博士と、北海道教育委員会の西脇対名夫主幹のご協力により、図版にはロシア語キャプションをつけることができました。千島列島やサハリン島をテーマとするロシア人研究者に活用いただくことが期待されます。

また、馬場氏が発掘した資料を多く保管している市立函館博物館で、長年学芸員を務められた長谷部一弘氏（現・函館市縄文文化交流センター学芸員）から「馬場脩収集、サハリン・千島列島の考古資料について」と、サハリン州ユジノ・サハリンスク市にある博物・記念館複合「勝利」学芸課長のイーガリ＝サマーリン氏から「1937年の岡正雄と馬場脩の北千島と樺太への旅の写真資料」を寄稿いただきました。サマーリン氏は1937年に調査した小泊岬付近の遺跡が1952年の津波のため破壊されたことを指摘しています。

今回目録に整理した写真の中には、未発表のものも多く、また馬場氏が発表された調査報告の中に掲載されたものでも、トリミングが異なるものも含まれており、目録の発行によりこの分野にいくばくかの情報を追加できたと考えています。



平成30年3月31日発行 A4判 108頁

(学芸グループ 笹倉いる美)

北海道150年記念展示

北海道庁測量標石「網走天測点」

平成30年は北海道と命名されて150年にあたります。

これを記念して当館では、北海道オホーツク総合振興局所蔵の北海道庁測量標石「網走天測点」を展示することとしました。この標石は高さ89cm、幅29cm、奥行き21cmの安山岩製の角柱で、明治20年代に北海道で行われた測量事業で用いられたものと推測されます。



網走天測点

標石の前面に記載されている「天測点」とは、天文測量によって経緯度を測定するときに基準とされたものです。明治19（1886）年に設置された北海道庁は、開拓をすすめるにあたり地理的調査が必要になったことから、全道の測量を行いました。

このとき天測点による経緯度の測定を全道6カ所（増毛、釧路、札幌、浦河、稚内、網走）で行っています。網走では明治26年1月1日～2月7日、網走測候所（現在の網走気象台付近）で測量を行ったという記録があります。

この測量をもとに、明治23～30（1890～1897）年にかけて「全道実測切図 二十万分一」が北海道庁地理課によって発行されました。この地図は海拔40^{メートル}毎に等高線をいれ、戸長役場、学校、温泉等を表示した精図で、北海道の地図は、この地図によって完成したといわれています。アイヌ語の地名が詳しく（主なものはローマ字でも）書き入れられていることも特徴のひとつです。北海道立文書館所蔵の地図を複製し、パネルとしたものを掲示しました。展示室では虫眼鏡を使ってこの地図を興味深くご覧になる姿がよく見られました。



会場のようす

(学芸グループ 笹倉いる美)

第33回特別展「North to the Future 北方から未来へ—日本人が出会ったアラスカ」

アラスカはエスキモーやアリュート、北方アサバスカン、北西海岸先住民といった先住民族が長年にわたって生活を営んできた土地です。この広大な美しい土地に、これまで多くの日本人が魅了されてきました。アラスカに惹きつけられた日本人とアラスカの先住民はこれまでどのような関係を結んできたのでしょうか？

本展ではアラスカ先住民と日本人の「出会い」の歴史を江戸時代までさかのぼり、現代までの足跡をたどります。

■主催：北海道立北方民族博物館

■協力：NPO法人和田重次郎顕彰会、国立民族学博物館、フランク安田友の会、井上敏昭氏、岡田淳子氏、久郷洋子氏、近藤祉秋氏、中垣哲也氏、平澤悠氏、和田利百氏

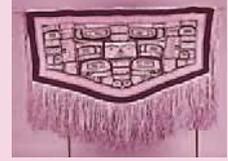
■会期 平成30年7月14日(土)～10月8日(月・祝)

■会場 北方民族博物館特別展示室

■観覧料：一般450円、65歳以上300円、高校・大学生200円

(常設展示とのセット割引もあります)

主な展示資料：明治期収集資料、アリュート小樽抑留関連資料、明治大学アラスカ学術調査資料など



チルカット・ローブ
トリンギット

特別展関連事業

上映会「オーロラ上映&トークライブ」7月14日(土) ①10:00-10:30 ②13:30-15:00

講師：中垣哲也氏（オーロラメッセンジャー）

解説会「特別展展示解説会」7月15日(日) 10:00-11:00

講師：野口泰弥（当館学芸員）

講座「北方アサバスカンの狩猟と名誉」7月21日(土) 10:00-11:30

講師：近藤祉秋（北海道大学アイヌ・先住民研究センター/助教）、野口泰弥（当館学芸員）

講演会「最後の開拓地アラスカ—30年の変化を見つめる」9月22日(土) 13:30-15:00

講師：岡田淳子（前当館館長）

講座「アラスカ先住民イヌピアットの村で」9月29日(土) 13:30-15:00

講師：是恒さくら（造形作家）

講習会「北西海岸先住民の技：チルカット織りのペンダント」9月30日(日) 9:30-16:30

講師：是恒さくら（造形作家）



鯨骨製仮面/エスキモー
収集：岡正雄

INFORMATION

行事報告

◆3月10日(土)はくぶつかんクラブ「イルガ文様の木箱づくり」(講師：笹倉いる美学芸主幹)を開催しました。



イルガ文様について学ぶ参加者

◆3月11日(日)講習会「ウイリタ刺繍の財布づくり」(講師：フレップ会)を開催しました。



講師の皆さま

◆4月21日(土)～5月20日(日)北網圏北見文化センターにて移動

展「北の切り文様」を開催しました。

◆4月21日(土)はくぶつかんクラブ「アイヌの文様でつくるレターラック」(講師：笹倉いる美学芸主幹)を開催しました。

◆4月28日(土)～5月27日(日)斜里町立知床博物館にて移動展「森と川の民ウデへ ウスリータイガの狩猟文化と工芸」を開催しました。

◆5月3日(木・祝)～6日(日)ゴールデンウィークイベントとして「ビーズ付き革のコンパクトミラーづくり」「北方文様のフェルト小物入れ」「こいのぼりのリフレクターづくり」「北方民族博物館シアター 春」を開催しました。



ミラーづくり、上手にできました！

◆5月12日(土)講習会「お細工物—エゾヤマザクラの袋」(講師：浜田智津子氏)を開催しました。

職員の異動

[退職] (平成30年3月31日)
太田 由美 (解説員)

[採用] (平成30年4月1日)
若山 恵子 (解説員)
南出 正人 (学芸グループ)

北方民族博物館だより
No. 109

平成30(2018)年6月22日発行
編集・発行 北海道立北方民族博物館
〒093-0042 北海道網走市字潮見309-1
Tel 0152-45-3888 Fax 0152-45-3889
e-mail: tonakai@hoppohm.org
http://hoppohm.org
指定管理者
一般財団法人北方文化振興協会